



# 人間を映す 鏡としての恐怖

茂木 健一郎

(脳科学者)

私は実は怖いものが苦手である。

特に、単純に怖いものではなく、心の奥底に忍びこんでくるような怖いものが苦手だ。魂の芯を震撼させるような怖いものは、積極的に求めめるというよりもどちらかというと避けてきた。だから、私とスティーヴン・キングとの出会いは全くの偶然だった。

実家の前のスペースに、地元の映画館のポスターを頼まれて掲出していたことから、毎月割引券とタダ券がもらえていた。

それで、月に一回、映画館で最新作を鑑賞していた。当時は一本立てで、今考えると贅沢な話である。

この作品を観るために行こうというのではなく、いわば「定期券」だから、関心がなかった作品に時に不意打ちされることもある。

映画『キャリー』も、そのようにして「油断」して観てしまった。そして、深く強くやらされた。日本公開は一九七七年、私が中学生の時である。

映画の『キャリー』には、思春期ならではの危うさと生命力が溢れていた。虐げられるものが、その内にたくわえていく暴力的なパワーが印象的な作品だった。ラストシーンまで油断ができない、感情のジェットコースターに乗るような映画だった。

しかし、不思議なほど、観た後に嫌な感じが残らなかつた。むしろ、人間というものの可能性を改めて感じさせるような、そんな後味だったのである。

『キャリー』の原作者がスティーヴン・キングであり、著者として初めてとなる同名の長編小説が出版されたのが映画を観た少し前の一九七四年だったということをはつきりと認識したのは、ずっと後のことになる。

## なぜホラーなのか

キングがホラー小説を生涯の仕事にしようとするきっかけは、兄と一緒に屋根裏部屋で父の残した本を漁っていた時、偶然に手にした怪奇小説の先駆者、ハワード・フィリップス・ラヴクラフトの短篇小説集を手にしたことだという。その瞬間、キングは、これこそが私の魂の「故郷」だと感じたのだという。そして、抱いた感覚は、キングがおじさんとりんごの枝を持つて水脈のありかを「ダウジング」で探り当てようとしていた時の感覚に似ていたのだという。

キングというホラー小説の大家の出発点が「ダウジング」に似たインスピレーションにあつたということは興味深い。

脳のさまざまな認知プロセスの中で、最も射程が長いのは「志向性」である。ある努力の方針を探り当てること。そしてそれを志すこと。キングのその後の作家としての長い活動の基礎が、この「屋根裏でのダウジング」にあつたことは意義深い。相対性理論で物理学の世界に革命をもたらしたアルベルト・アインシュタインが宇宙の神秘に興味を持ったきっかけが、子どもの頃に父親がプレゼントしてくれた方位磁針がいつも同じ方向を指していることに感銘をうけたのである。

日本でもそなうだが、あるジャンル小説の作家とみなされてしまうと、文学の世界では軽く見られたり、偏った評価を受けてしまうリスクがある。ダブルディの編集者は、そこを心配して、キングに対しても忠告をしたのだろう。

それに対して、キングが「ホラー小説の作

小説家志望の男ジャックが誰もいないはずのホテルのバーで酒を飲むシーン。映画『シャイニング』より。  
©Allstar/amanaimages

キングのホラー小説はなぜ、多くの人に読まれているのか。非言語的にしか知覚されない気配や予感といったものの描き方が巧みだと脳科学者の茂木健一郎は語る。キング作品における恐怖の普遍性を脳科学から読み解く。

